びわこの考湖学

—第2部—

2

聖なる山林で神と出会う

幻の修行僧 金粛

仏教が伝来して寺院が建てられるようになったのは飛鳥時代（7世紀）。当時の仏教といえば、寺院に籠もって難しい経典を読み、国家のために祈るというイメージを抱かれることが多いようです。しかし、『養老令』によると、僧たるもの山林で修行することと規定されています。学問のみならず、聖なる山林で修行することにより、仙人のような不思議な力を身に付けることが求められていたのです。

例えば、天智天皇勅願の崇福寺も仙人の夢告げをきっかけに創建されたと伝えられていますし、『古事記』にも登場する「日枝の神」つまり比叡山にいます神の山の頂に伝教大師最澄が延暦寺を建立しているのです。

7世紀から8世紀にかけての奈良時代のはじめごろまでに活躍していた僧としては、役行者（役小角）や泰澄がその名を広く知られています。彼らは僧でありながら神々のいます山林で修行し、鬼を使役したり地元の神とも大きくかかわっていました。山林修行をした奈良時代の僧としては、東大寺の大仏造営に大きくかかわった東大寺初代別当金鐘菩薩良弁、東大寺二月堂を創建した実忠や、称徳天皇の病を治したことにより寵愛を受けるようになった弓削道鏡なども知られます。また平安時代の話ですが、比良山の僧が不思議な力を使って鉢を空に飛ばしていたという伝説も残されています。彼もまた神のいます山林での修行によって、その力を得たのでしょう。

後に神と仏の融合した有様を「神仏習合」と呼びますが、日本に仏教が広まって程なく、既にカミとホトケはかかわりあっていたのです。

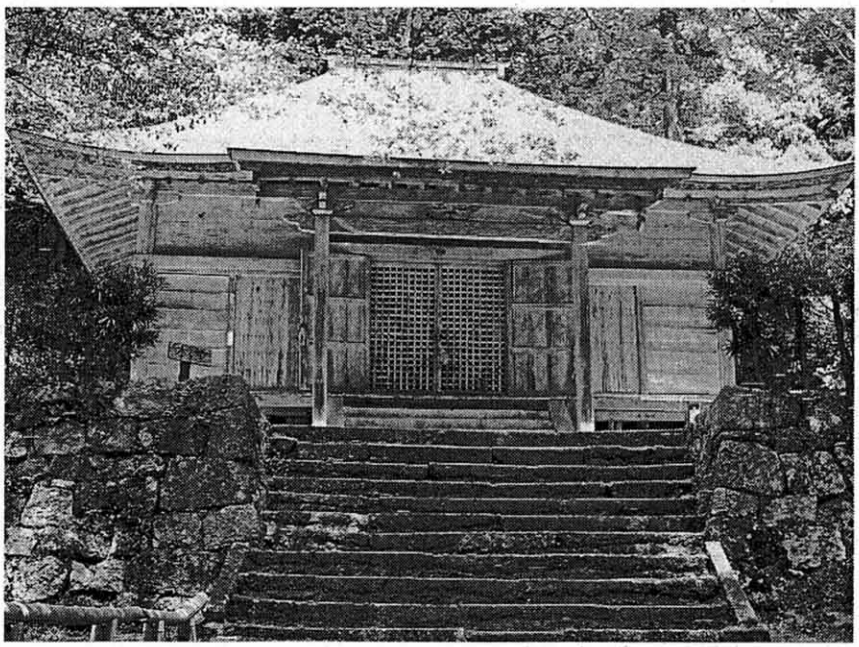
さて、役行者は奈良と大阪にまたがる葛城山系を、泰澄は北陸の白山を主な修行場にし、山岳寺院を開いていったと伝えられています。では琵琶湖周辺ではいつごろからどのような山林修行者が活躍していたのでしょうか。

先ほど挙げた良弁や実忠は、奈良時代中ごろに現在の湖南アルプスを舞台にしていたことが諸史料からうかがえます。山がちなこの地域では、金勝寺など多くの山岳寺院が建立されています。それぞれの寺院の縁起や『興福寺官務牒疎』という文書をみてみると、どの様な僧が寺を開いたかを知ることができます。その中には良弁や実忠の名前も見えるのですが、「金粛」という僧が開いたとされる寺院が意外に多いのです。

良弁は金鐘菩薩とも呼ばれることから金粛と混同されることもありましたが、これらの文書を見る限りでは、金粛の活躍した時期は奈良時代のはじめごろに限定されています。良弁が活躍したのが奈良時代中ごろですので、同一人物であるとすると生前もしくはかなり幼少のころに数多くの寺院を開いたことになり、不自然です。つまり、良弁の一世代前である役行者や泰澄が活躍したのと同じころに、金粛という名の僧が湖南アルプスを舞台に山林修行し、数多くの寺院を開いていったことがわかるのです。良弁や実忠があまりにも有名すぎたこともあってか、残念ながら金粛がどの様な活躍をしたのかを具体的に示す史料はありません。

とはいえ、全国的にみてもかなり早い時期から、神々がいます琵琶湖周辺の山々に魅かれて修行していた金粛をはじめとする僧たちが存在していたことは間違いないのです。

（滋賀県文化財保護協会 畑中英二）



金勝寺本堂